

R RITSUMEIKAN



Environment Report

立命館学園
環境報告書

vol. 15 2025

32,238t-CO₂

459,022m³

Q

これらの数字は
何を示して
いるでしょう？

[答えは裏表紙]

立命館地球環境委員会

「持続・循環可能な地球環境の未来」を目指して



学校法人立命館 総長 仲谷 善雄

生成AIやロボットの急速な進化、戦争や紛争の勃発、複雑化するエネルギー問題、自然災害など、私たちを取り巻く環境はこれまでにない転換点を迎えています。

このような社会情勢の中、2025年11月に国連気候変動枠組条約第30回締約国会議（COP30）が開催されました。成果としては、緩和や資金等の分野を横断し、特に関心の高い事項を取り上げた「グローバル・ムチラオ決定」が採択されたことです。世界各地で気候変動による災害リスクが増大している中、サステナビリティの取り組みや循環型社会への移行に向けてグローバルな視点で実行に移すことは大きな成果であると考えています。

ただ、こうした地球レベルで生起する社会課題は、さまざまな分野において、互に関連し影響し合い、単純には解決が難しい複雑な問題です。これまで築いてきた社会の仕組みや機能に見直しを迫る課題でもあり、私たちはこれらの課題を長期的視点で捉えなおし、世界的視野を持ってグローバルに連携し、解決に向けて新たな価値を創造していく必要があります。加えて、このような複雑さを増す課題の解決にあたっては多様性が重要であると考えます。多様な考え方や構成員によって生み出される新たな価値創出こそ、これからの未来を切り開き課題の解決へと導いていくのです。

2021年度、本学は2030年にカーボンニュートラル・キャンパスの実現をめざすことを決定しました。2030年の脱炭素転換に向けて、既存施設の省エネ改修、太陽光発電等の創エネ設備の充実化、再生可能エネルギー電力の購入等を推進しています。また、文部科学省・経済産業

省・環境省等による「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリジョン」に「地域ゼロカーボンWG」の幹事大学として参画しているほか、京都市が進める「脱炭素先行地域づくり事業」においては、京都市を訪れる修学旅行生向けの環境教育「脱炭素修学旅行 立命館大学キャンパスツアー」の実施や、持続可能な観光やMICE^{*}のあり方についての検討に参加しています。2025年度には、「BKC自然緑地」が地域生物多様性増進法に基づく自然共生サイトに認定されました。カーボン・ニュートラル（脱炭素）とともに、環境分野の最重要課題に位置付けられるネイチャー・ポジティブ（生物多様性保全）においても、本学が確かな歩みを進めたことも大きな成果の一つです。

こうした取り組みを重ねてきたことで、イギリスの高等教育専門誌Times Higher Education（THE）がSDGsに関する各大学の社会貢献活動や研究活動をランク付けした「THEインパクトランキング（THE Impact Rankings）2025」において、本学は総合評価201-300位に入り、国内私立大学においては1位タイとなる高い評価を獲得し、「持続・循環可能な地球環境の未来」に向けて一歩ずつ前進しています。

「立命館学園環境報告書」では、環境保全、環境負荷低減などに関する立命館学園の諸活動を紹介しています。地球環境問題の解決には、私たちの日常的な取り組みも求められます。本報告書を通して、その問題を理解し解決に繋がる行動の一助となれば幸いです。

※企業会議（Meeting）、企業等の報奨・研修旅行（Incentive Travel）、国際機関や学会による会議（Convention）、展示会・イベント（Exhibition/Event）の頭文字を使った造語で、ビジネスイベントの総称

■ 環境負荷削減の中長期目標^{*}

年度・段階	2024年度（達成状況）	2030年（中期目標）	2050年（長期目標）
 エネルギー <small>〔温室効果ガス排出量〕</small>	3.7% 削減 <small>（2019年度基準）</small>	カーボンニュートラル	地球環境負荷軽減への寄与
 水 <small>〔1㎡あたり〕</small>	38.1% 削減	46% 削減 <small>（2013年度基準）</small>	地球環境負荷軽減への寄与
 一般廃棄物 <small>〔総量〕</small>	34.6% 削減	30% 削減 <small>（2019年度基準）</small>	石油プラスチックによる環境汚染ゼロ
 教育・研究	環境意識の高い、様々な分野での地球環境保全、環境負荷低減活動のリーダー的人材輩出。キャンパスを実験フィールドとした産学連携の技術開発へ繋げる事で社会に貢献し、併せて自らの環境負荷低減に繋がる好循環のサイクルを生み出す。		
 地域社会への展開	学生が中心となった地域貢献活動の充実、各キャンパス毎に行政と連携強化。		
 提携大学との連携	提携大学の環境負荷削減に対して協力することで世界的レベルでの温室効果ガス排出量削減等に貢献する。		
 情報公開	『見える化』により、学園構成員の一人ひとりが問題点を正しく認識し、その改善に向けて、積極的に取り組んでいくことで環境負荷低減に繋げる。		

立命館環境行動指針

立命館学園は、立命館憲章において、「人類の未来を切り拓くため、学問研究の自由に基づき普遍的な価値の創造と人類の諸課題の解明」に向けて邁進することを宣言している。人間を取り巻く環境の維持、新たな循環システムの構築は、まさに私たちが志す「人類の未来を切り拓く」取り組みに他ならない。自然科学のみならず、社会制度・システムの再構築や人間の行動原理の理解と解明など、様々な分野における人材育成と学術研究は、本学園が果たすべき大きな役割の一つであると認識する。

立命館は、学園のビジョン「挑戦をもっと自由に Challenge your mind Change our future」に基づき、学園構成員が、既存の枠を超え学園全体が丸となり、教育・研究を通じて持続・循環可能な地球環境の「未来をつくる」決意をここに表明する。

行動指針

立命館は、持続可能な開発目標の達成に向けた社会的責任を果たし、社会共生価値のさらなる創出を図るべく、カーボンニュートラル・キャンパスの実現をめざす。具体的には、温室効果ガス排出量削減を含む環境負荷低減に向け、自主的な削減目標を設定し、学園構成員一人ひとりが主体的に行動する。

- [1] キャンパスのエネルギー、紙、水の使用量及び廃棄物の排出量を正確に把握し、分析、評価することで、環境負荷の低減ならびにエネルギーコスト削減につなげる。キャンパス整備計画においてはエコキャンパス化を追求する。
- [2] 小学、中学、高校、大学、大学院それぞれの世代に合わせた環境教育を推進するとともに、児童・生徒・学生・大学院生による取り組みの支援を通じて、様々な分野で地球環境保全、環境負荷低減活動のリーダーとなる人材を育成する。
- [3] キャンパスを産学連携の技術開発の実験フィールドとして研究活動に活用し、また自らの環境負荷低減に繋げる。
- [4] 環境教育分野での、自治体・地域社会・NGO・NPO・他大学等との連携を推進する。
- [5] 情報公開を通じて、学園の環境への取り組みを『見える化』することにより、学園構成員の一人ひとりがその到達点と課題を認識し、継続的に改善に取り組むサイクルを創り上げ、持続的な環境負荷低減の実現を目指す。

2014年11月26日
(改定) 2022年2月16日
学校法人立命館





立命館学園の 環境分野の教育・研究活動



立命館学園

「BKC自然緑地」が自然共生サイトに認定

2025年12月16日(火)、びわこ・くさつキャンパス(略称「BKC」)内の「BKC自然緑地」(約3.45ha)が、地域生物多様性増進法に基づく「自然共生サイト」に認定されました。環境省は、民間による生物多様性の保全の取り組みが行われている区域を「自然共生サイト」として認定する制度を2023年度に開始しました。その後、この制度を法制化した地域生物多様性増進法が制定、2025年4月に施行され、主務大臣(環境省、農林水産省、国土交通省)による認定が行われています。

「BKC自然緑地」には、在来種を中心に約300種の動植物が生息しており、近畿地方や滋賀県等のレッドデータブックに記載される絶滅危惧種の生息も確認されています。同地は、BKC開設時の環境影響評価において保全が約束されて以来、30年以上にわたり域内の環境保全や、保護対象

とする貴重な動植物の生育保全に取り組んできました。今回の認定は、「BKC自然緑地」が長年にわたって自然環境を維持しつつ、研究・教育や地域連携のフィールドとして利活用されてきた点が評価されたものです。

立命館は「ネイチャーポジティブ」の実現および30 by 30目標(2030年までに陸と海の30%以上を保全する目標)の達成に向け、「BKC自然緑地」をはじめとする保有緑地や森林の保全に取り組むとともに、環境分野の研究・教育、さらに政府・自治体・企業などのステークホルダーと連携した取り組みを一層推進してまいります。



立命館大学

「THEインパクトランキング 2025」国内私立大学で2年連続1位タイを獲得

イギリスの大学評価機関 Times Higher Education(略称THE)が2025年6月に「THEインパクトランキング 2025」を発表されました。世界の2,526校が対象となり、立命館大学は総合順位201-300位にランクインし、国内の私立大学で2年連続1位タイを獲得しました。また、このランキングでは総合評価に加えてSDGs別ランキングも発表され、本学は「SDG1: 貧困をなくそう」で世界35位(3年連続全国1位)となり、世界トップ100にランクインしました。また、「SDG2: 飢餓をゼロに」、「SDG6: 安全な水とトイレを世界中に」、「SDG15: 陸の豊かさを守ろう」

で世界トップ200にランクインしました。今後も立命館大学は、教育や研究を通じてSDGsの達成や国際社会共通の課題の解決に積極的に取り組んでいきます。



Times Higher Education
Impact Rankings 2025



立命館学園の 環境分野の教育・研究活動



立命館アジア太平洋大学 (APU)

九州圏内の大学では初の「フェアトレード大学」に認定

2025年2月、フェアトレードの理念と実践を日本および国際社会に普及している一般社団法人日本フェアトレード・フォーラムより、「フェアトレード大学」に立命館アジア太平洋大学(以下APU)が認定されました。

「フェアトレード大学」とは、フェアトレードの理念に賛同して推進活動に取り組んでいる大学を、イギリスなどの基準を準用した日本独自の基準に基づき、認定する仕組みです。日本では2014年に「フェアトレード大学」の認定制度が作られ、APUは国内の大学では7大学目、九州圏内では初めて認定を受けることとなります。

APUでは、大学が目指す持続可能な社会を実現するためにフェアトレードが重要であるという考えから、「立命館アジア太平洋大学フェアトレード憲章」を制定しました。また、6つの学生サークルと協力しながら、大学内のフェアトレード普及に積極的に取り組んできました。特に学生団体「Ones'1 Fair Trade」は、APUでフェアトレード憲章を制定する以前の2006年から現在まで、フェアトレード商品の販売のために、現地訪問や学

内外での啓発イベントなどを継続して活動しており、今回の認定にも大きく貢献しました。また、立命館生活協同組 APU-COOP にも賛同いただき、フェアトレード商品の企画や販売のなど、フェアトレードの理解浸透に共に取り組んでいます。



FAIR TRADE UNIVERSITY

立命館中学校・高等学校

高校生国際フォーラム「Rits Super Global Forum 2025」を開催

2025年11月9日(日)から13日(木)までの5日間にわたり、国際的な高校生フォーラム「Rits Super Global Forum 2025」を主催し、立命館高等学校を会場として実施しました。本フォーラムは、2013年に海外4校のゲストを迎えて始まり、今年で12回目を迎えます。今回は海外12校に加え、

立命館学園の附属校からも参加者を迎え、地球規模の課題について議論し、解決策を探る5日間となりました。

今年度のテーマは「coexistence (共生)」。

時代とともに変化するモノやコトをどのように受け止め、どのように折り合いをつけながらより良い生き方を目指すのか、この問いに対し、10代ならではの視点からフレッシュで創造的なアイデアが数多く生まれました。

このフォーラムでは、毎年設定されるテーマを深く探究するだけでなく、学校や国境を越えて編成されたグループでの協働も重視しています。そのため、参加生徒は英語力の向上にも継続的に取り組み、この場でその成果を存分に発揮しました。また、議論や交流を通じて、将来に向けた新たな学習目標を設定する機会ともなりました。

貧困や環境問題をはじめとする地球規模の課題は、ますます深刻化しています。それに伴い、国際理解に関わる資質・能力が一人ひとりに求められる時代となっています。民族や国境を越えて共に課題解決に挑む姿勢、そしてそれを支える正しい知識や語学力を育む教育の重要性が、いま改めて強く問われています。本フォーラムがその一助となり、未来を担う若者たちの成長に寄与することを心より願っています。





立命館学園の 環境分野の教育・研究活動



立命館宇治中学校・高等学校

生徒と幼稚園児がSDGsを共に学ぶ取り組みを実施

2025年12月17日(水)、立命館宇治高等学校2年生の生徒グループが、選択科目「SDG研究1」の取り組みの一環で、幼稚園児と共に使用済み段ボールやペットボトルを利用しておもちゃを作成するワークショップを行いました。

生徒自らが幼稚園と連絡を取り、みのり幼稚園での実施が実現しまし

た。この取り組みはアップサイクリング(=廃棄物に新たな価値を加えて生まれ変わらせる創造的再利用)や廃棄物削減の概念を広げるために取り組んでいます。生徒たちはもちろんのこと、園児たちも楽しみながら宇宙船地球号の一員としての意識を持ってくれました。



立命館慶祥中学校・高等学校

C-Rits焼尻島PRパートナーが環境省より特別賞受賞

2026年1月31日(土)から2月1日(日)に実施された環境省主催の「全国ユース環境活動発表大会(全国大会)」において、C-Rits焼尻島PRパートナーが特別賞を受賞しました。本大会は、全国の高校生が取り組む環境活動を発表し、その成果や新しい発想を社会に広く共有することを目的として開催されるものです。

活動テーマは「行動変容」です。海岸清掃やプラスチックのリサイクルなどの直接的な環境活動だけでなく、「自然そのものを好きになること」

が環境保全につながるのではないかと考えるのもと活動しています。北海道の焼尻島について、町役場から公認を受け、中高生ならではの視点でその魅力を発信しています。

焼尻島の豊かな自然や文化を伝えることで、訪れた人や関わる人が「この自然を守りたい」と思えるきっかけを生み出し、結果として環境保全の行動が循環していく社会を目指しています。今回の受賞を励みに、今後も地域と連携しながら自然の価値を発信する活動を続けていきます。





立命館守山中学校・高等学校

世代を超えて水環境を考える「世界湖沼の日 プレフォーラム 2025」を開催

2025年7月29日(火)、立命館守山中学校・高等学校において「World Lake Day プレフォーラム 2025 ～びわ湖から世界へ、水をめぐる未来共創～」が開催されました。

本フォーラムは滋賀経済同友会「MLGsと私たち部会」が主催するものですが、本校での開催となったことから、生徒5名が大人に混じって運営会議に参加し、中高生にとっても楽しく学べるイベントになるよう積極的に参画しました。

第一部では、国際湖沼環境委員会 (ILEC) より「世界湖沼の日」設立の背景や意義について説明がありました。また、生徒らがプリズペンでの国際会議に参加した体験を報告し、若者の視点から今後の展望を語りまし

た。さらに、滋賀から世界へ発信する実践事例として、地域・企業・大学が連携する「DASラボしが」や、環境保全型経営を推進する株式会社日吉の取り組みが紹介されました。

続く第二部では、本校卒業生が在学中に制作した「MLGsカルタ」や「ふりかけプロジェクト」が紹介され、若者が主体的に取り組む活動の意義が発信されました。その後の交流会では、世代や立場を超えた参加者が軽食を囲みながら自由に意見交換を行い、湖と人の関わりや未来への課題について活発な対話が交わされました。

今回のプレフォーラムは、若者と企業が共に水環境の未来を考え、発信し、行動へとつなげる貴重な機会となりました。



立命館小学校

RITS TRY! 私たちのアクション ～SDGsすどころ製作～

2022年度、当時の6年生有志が始めた「RITS TRY」という活動が、2025年度の6年生によって復活しました。先輩がプラスチックごみを減らす活動を行っていたことを知り、

自分たちができることは何か考え、小学生が楽しみながら学ぶためにアイデアを出し合った結果、「SDGsすどころ」の製作に取り組みました。

製作するにあたっては、卒業生である中野実桜さん

(現在大学生)の活動を参考にしました。中野さんは、高校生の時に多様性をテーマにしたボードゲーム「IROIRO」を考案し、クラウドファンディングで製品化されています。

すどころの試作品が完成した2025年3月、メンバーの4人は学年集会で同学年児童にプレゼンテーションを行い、試作品で遊んでくれる人を募集しました。そして、参加した人からアンケートでフィードバックをもらいました。

現在は、その意見を参考にしながらデザインや文章表現の改善を行い、完成に向けて作業を続けています。先輩たちから刺激を受け、その思いを継承しながら、今の自分たちができることに挑戦する「RITS TRY」の姿は後輩たちにも引き継がれてほしいと思います。



サステイナブルキャンパスの実現に向けて

立命館では、サステイナブルキャンパスの実現に向け、省エネルギー・省資源化に関する施設整備が行われています。ここでは、その一部をご紹介します。

衣笠キャンパス 存心館・明学館への太陽光発電設備の導入

立命館では、「2030年 カーボンニュートラル・キャンパスの実現」を目標に掲げ、温室効果ガス排出の実質ゼロ（ネットゼロ）を目指した取り組みを進めています。その一環として、衣笠キャンパスでは太陽光発電設備の導入が段階的に進められており、2023年度には研心館に、2024年度には存心館・明学館に設置されました。これらの設備は、京都市が代表を務める「脱炭素先行地域づくり事業」の補助を受けて導入されたもので、建物の屋上など未利用空間を活用することで、環境負荷を抑えつつ持続可能なエネルギー供給を実現しています。大学キャンパスが再生可能エネルギーの実証フィールドとなることで、教育・研究・地域連携の観点からも意義深い取り組みとなっています。また、こうした設備整備は、地域の脱炭素化を推進する「京都市脱炭素先行地域推進コンソーシアム」における大学の役割を具体化するものであり、立命館が座長を務める「サステナブル・ツーリズムWG」などの活動とも連動しています。



存心館



明学館

付属校の再生可能エネルギー電力切り替え

立命館の附属校（立命館小学校、立命館中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校）では、2024年度より再生可能エネルギーによる電力への切り替えが完了しました。これにより、3校合計で年間約1,440トンのCO₂排出削減が見込まれており、教育機関としての環境負荷低減に大きく貢献しています。電力供給を担うのは、京都府福知山市に本社を置く「たんたんエナジー株式会社」です。同社は2018年に設立され、地域の市民や自治体、大学などと連携しながら、太陽光発電や蓄電池の導入を進める新電力会社で、立命館大学卒業生が代表を務めており、立命館ソーシャルインパクトファンド（RSIF）からの出資も受けています。たんたんエナジーは、地域でつくった電気を地域で使う「地産地消型」の再エネ供給モデルを展開しており、附属校への電力供給はその象徴的な事例です。再エネ導入に合わせて環境教育も行われており、持続可能な社会の担い手を育てる教育的意義も大きい取り組みとなっています。



「たんたんエナジー株式会社」が立命館小学校で6年生を対象に実施した気候変動をテーマにした環境授業の様子

立命館地球環境委員会

サステイナブルキャンパスの 成果と未来

Sustainable Campus

立命館学園は「人と自然が共生するキャンパス」を目指し、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを進めてきました。サステイナブルキャンパスの理念は、単なる省エネルギーやCO₂削減にとどまらず、地域環境との調和、生物多様性の保全、そして学びの場としての価値向上を重視しています。この理念のもと、各キャンパスでは緑化や自然再生を軸にした活動が展開されています。

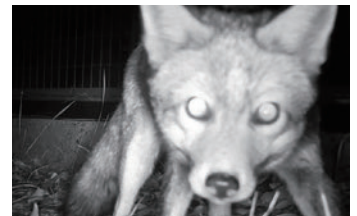
大井ばらきキャンパス（OIC）では、ボランティアの市民の方々や学生・教職員が協働し、「木を植える～育てる里山プロジェクト～」として在来種の植樹による里山保全活動を実施しました。この取り組みは、都市部で失われがちな生態系を回復し、キャンパス内に多様な生物が生息できる環境を創出することを目的としています。緑地の拡充や水辺空間の整備により、昆虫や鳥類の定着が促され、OICは地域の自然ネットワークの一部として機能するようになりました。



育てる里山プロジェクト

こうした活動は、単なる景観改善にとどまらず、学生が主体的に環境課題に取り組む学びの場を提供し、キャンパスを「生きた教材」とする役割も果たしています。サステイナブルキャンパスは、未来の社会を担う人材育成と環境保全を両立させる場として、今後さらに進化していきます。

こうした環境が整いつつある中で、本学政策科学部の桜井良准教授とOIC総合研究機構の高畑優研究員が、OICにおける野生動物の利用状況を2025年1月から調査しています。およそ一年間にわたる継続調査の結果、これまでキツネ、テン、タヌキ、アライグマ、ハクビシン、アナグマ、ヌートリアなどの野生動物が確認されました。特にキツネは、大阪府のレッドリストでは絶滅危惧I類に指定されている貴重な野



OICで発見されたキツネ（上）およびテン（下）

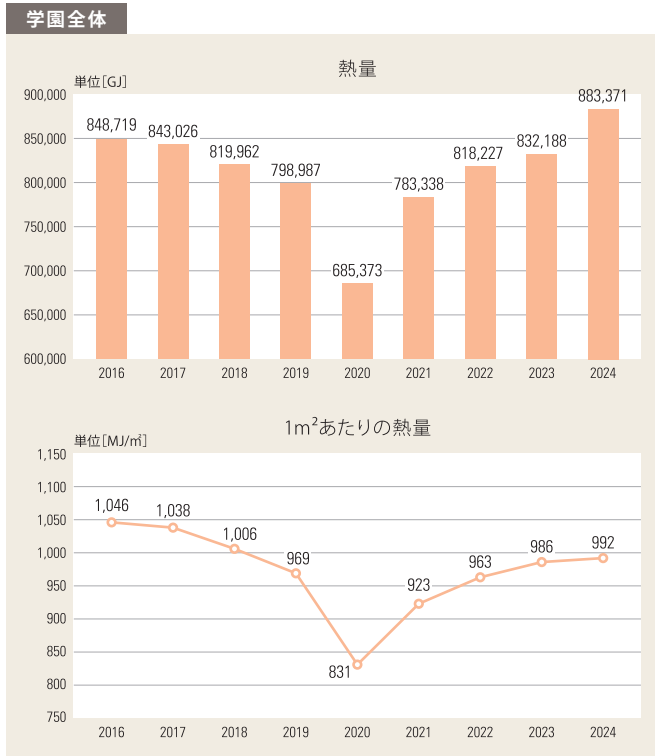
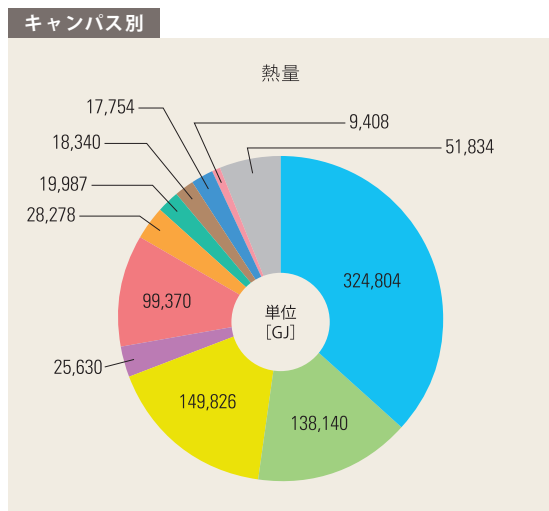
生動物で、近くにまとまった緑地がほとんど存在しないOICにおいて、キツネが生息・利用していることは、府内の野生動物管理者や研究者、そして地域の住民にも大きな驚きとともに受け止められました。

都市型キャンパスであるにもかかわらず、多くの野生動物が利用していることは、2015年に更地からできあがったOICにおいて、市民や関係者によって10年にわたって行われてきた緑化プロジェクトや里山づくりの成果といえます。今後も調査を継続し、野生動物の種類やキャンパスの出没頻度などに関するデータの蓄積をします。またキャンパスに通う学生や教職員、そして地域住民に、多くの野生動物が身近に生息していることを伝えるための普及啓発に取り組んでいきます。

環境影響項目の使用・排出実績

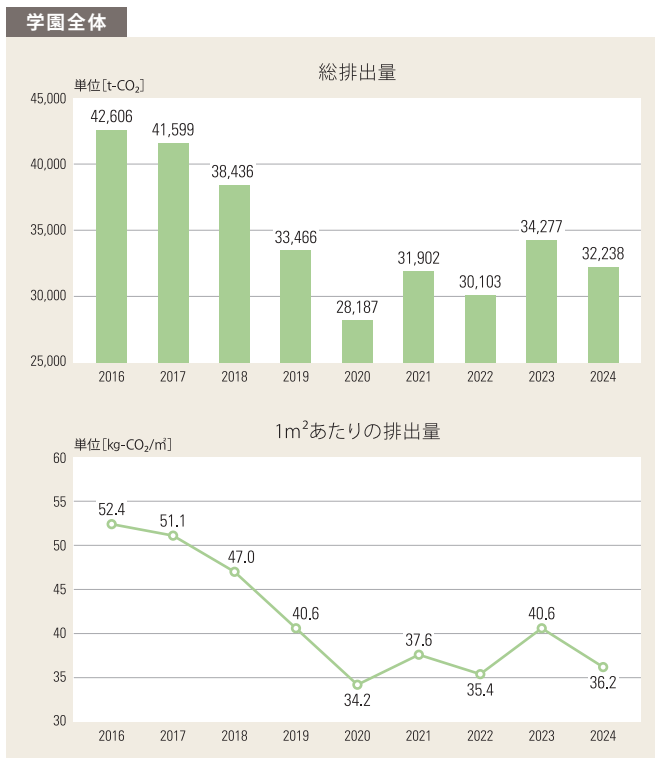
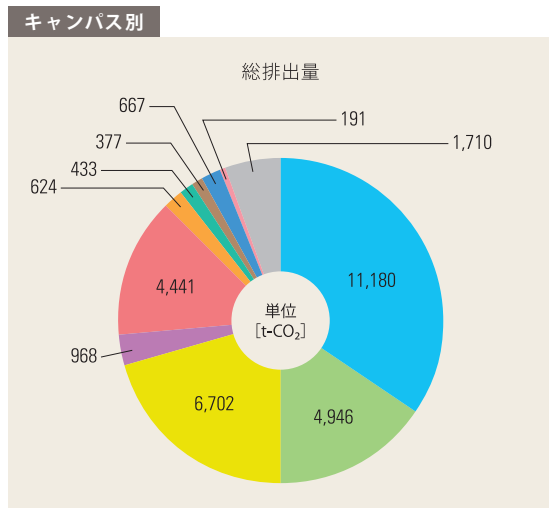
2024年度 エネルギー使用量 [熱量換算]

2024年4月の大阪いばらきキャンパスH棟共用開始により、施設稼働率が上昇し、結果として2023年度比でエネルギー使用量が増加しました。



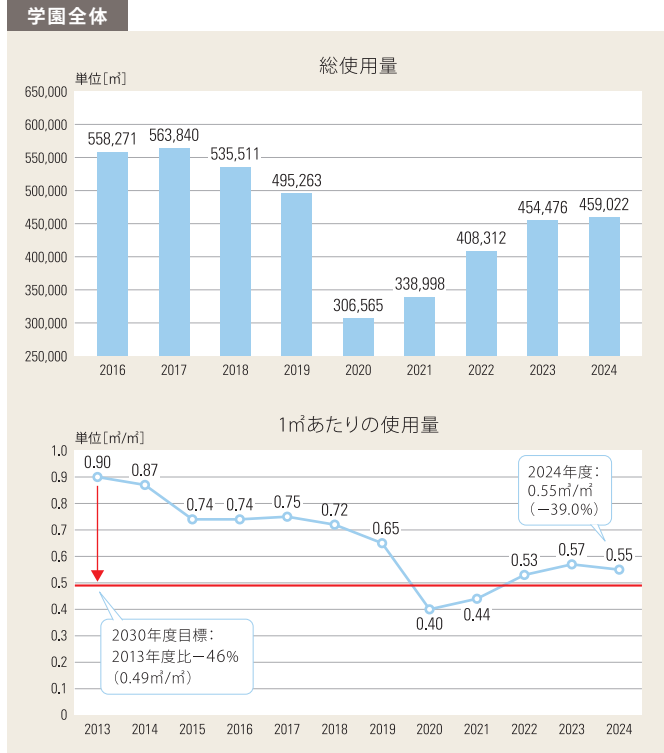
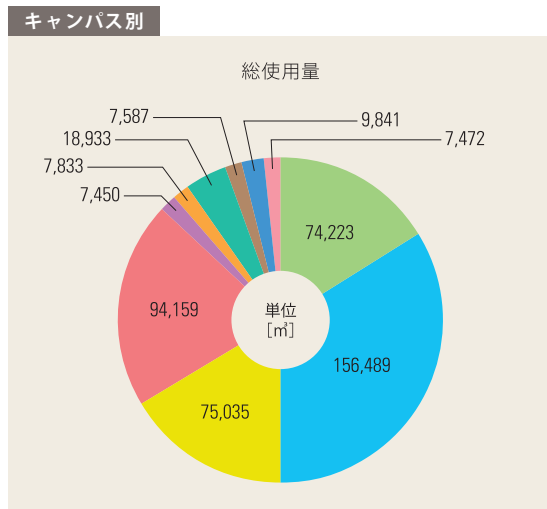
2024年度 温室効果ガス排出量

エネルギー使用量が増加したにもかかわらず、温室効果ガス排出量は減少しました。これは太陽光発電の設置等による再生可能エネルギーへの転換や照明器具や空調設備等において高効率設備への交換を進めていることにより、電力の排出係数が下がったことが影響しています。



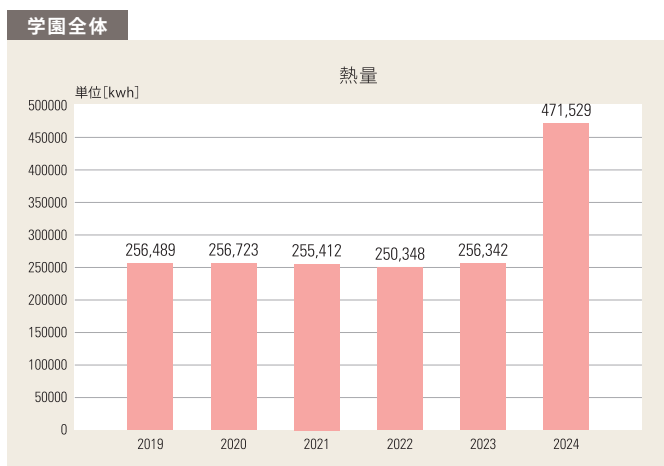
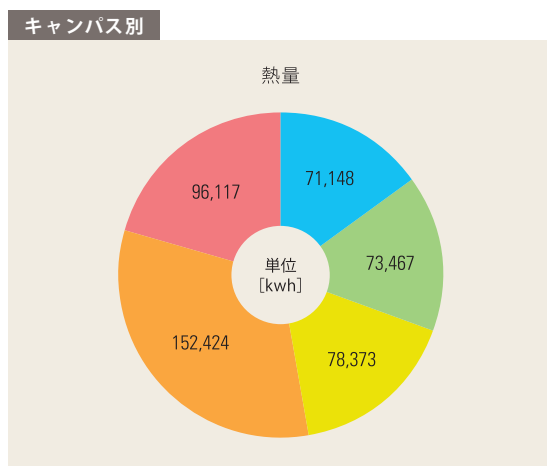
2024年度 水使用量

エネルギー使用量と同様、2024年4月の大阪いばらきキャンパスH棟共用開始により、施設稼働率が上昇し、結果として2023年度比で水使用量が増加しました。引き続き、「各種節水器具の導入」・「節水の呼びかけ」等により、中期目標達成に向けて水使用量の削減に努めていきます。



2024年度 創エネ設備による発電量

2030年度カーボンニュートラル達成に向けては、学内に太陽光発電をはじめとした創エネ設備による発電を進めることが重要となります。2024年度は衣笠キャンパス存心館・明学館、APUに太陽光パネルを新設し、2023年度に比べ、発電量が大幅に増加しました。



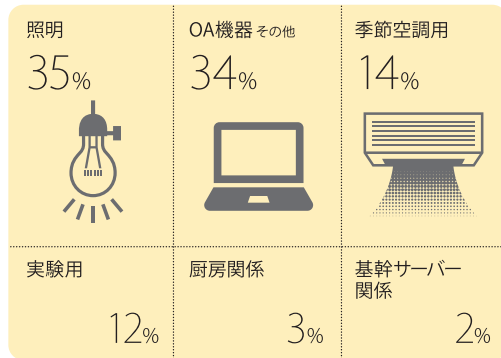
キャンパス別グラフの色分け

立命館大学衣笠キャンパス	立命館大学朱雀キャンパス	立命館宇治中学校・高等学校	立命館小学校
立命館大学びわこ・くさつキャンパス	立命館アジア太平洋大学	立命館慶祥中学校・高等学校	その他
立命館大学大阪いばらきキャンパス	立命館中学校・高等学校	立命館守山中学校・高等学校	

環境影響項目の内訳と前年度対比変動量のめやす

2024年度 エネルギー使用量 [熱量換算]

電気使用の割合 (概数)



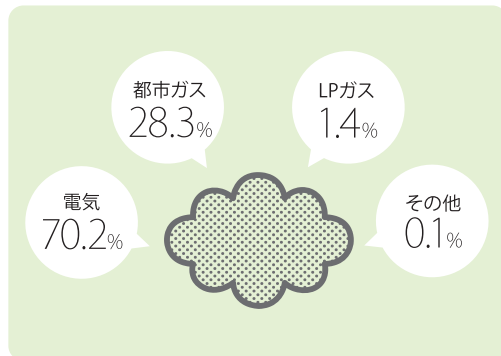
2024年度の立命館のエネルギー使用量(熱量換算)は2023年度比で51,183GJ増加しました。これは平均的な1世帯あたりの年間エネルギー使用量を27.8GJ(※1)とすると、約1,841世帯分に相当します。

※1: 令和5年度家庭部門のCO₂排出実態統計調査



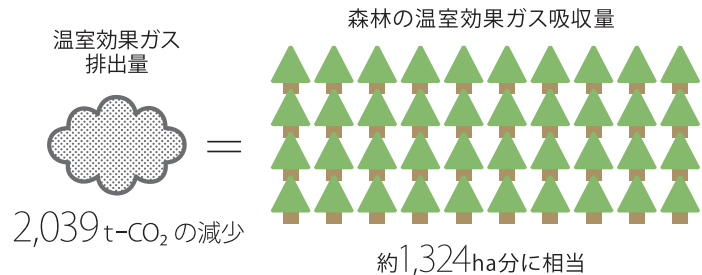
2024年度 温室効果ガス排出量

温室効果ガス排出量の起源別割合



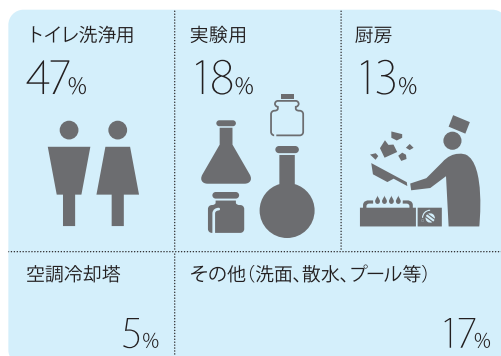
2024年度の立命館の温室効果ガス排出量は2023年度比で2,039t-CO₂減少しました。この排出量は、森林(天然生林)の平均的な温室効果ガス吸収量を1.54t-CO₂/ha(※2)とすると、約1,324ha分に相当します。

これは、立命館学園が所有する総土地面積(約232.2ha)(※3)の約5.7倍に相当します。 ※2: 京都市地球温暖化対策条例の算定基準を参照 ※3: 2025年3月31日現在

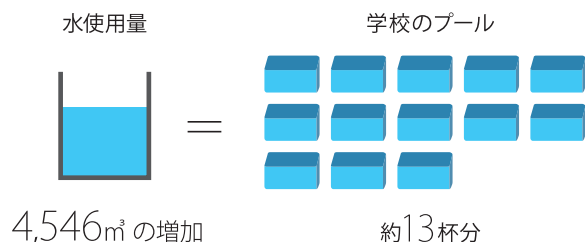


2024年度 水使用量

水使用量の割合 (概数)



2024年度の立命館の水使用量は2023年度比で4,546m³増加しました。これは平均的な学校プール(25m×12m×1.2m=360m³)に換算すると約13杯分に相当し、500ml入りペットボトルでは約909万本に相当します。



年間を通じたピークカット（最大電力削減）の取り組み

空調機器の使用により電力需要の高まる夏季・冬季においては、①2030年カーボンニュートラルの目標達成、②文部科学省からの節電要請対策、③電力会社との契約電力遵守の3つの観点から節電の取り組みを実施しています。

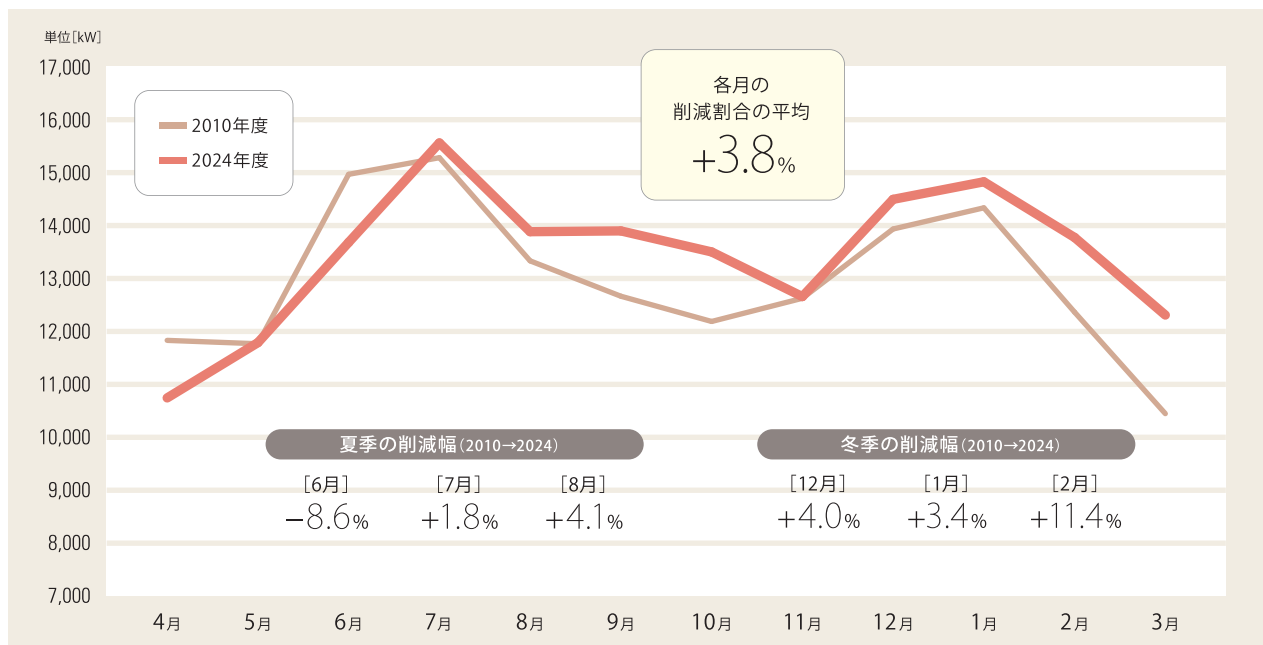
2024年度における各月の削減割合平均は2010年度比3.8%となり、これまでの消費電力に比べ最大となりました。これは、2024年4月よりOICでH棟が本格稼働したことなどが影響しています。

今後も引き続き以下のような取組を推進し、電力需要のピークカット・平準化に向けた施策を推進していくことが重要となります。

- 1) 消し忘れ防止のための空調・照明スケジュール運転、支障のない範囲での共用部照明間引き、長期休暇中の昇降機一部停止などといった施設運用上での取り組み。
- 2) こまめな消灯の呼びかけ等、節電・省エネ行動の推進。
- 3) その他、各キャンパスの状況に応じた取り組み（コージェネレーションシステム適正稼働によるデマンド超過回避、全熱交換機の整備による換気負荷の低減等）

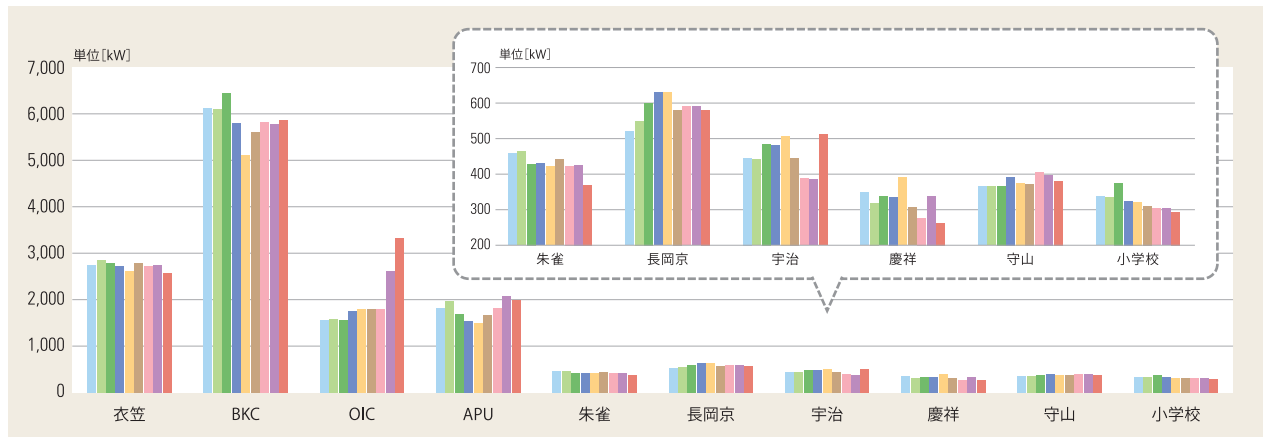
※OICの2022年度7月データはシステム不具合により欠損しているため、2021年度7月データを引用している

立命館学園 10 キャンパスの最大電力の推移（2010年度はOICを除く9キャンパス）



キャンパス別最大電力推移

2016年度 2017年度 2018年度 2019年度 2020年度 2021年度 2022年度 2023年度 2024年度



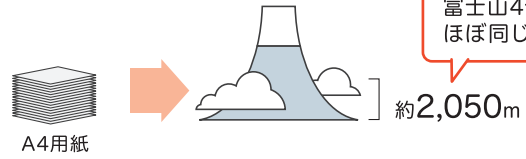
[年間紙使用量]

各キャンパスで購入したコピー用紙をA4に換算して使用枚数を算出しました。キャンパス別に紙使用枚数を比較すると、2024年度の使用枚数は立命館学園全体で22,773,465枚で、最も多いのは衣笠キャンパス(6,255,800枚)、次いでBKC(4,267,275枚)でした。学園全体では、2023年度より2024年度は約52%の削減、2019年度と比較すると約73%削減しています。

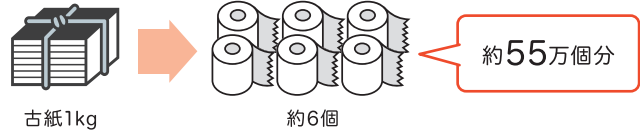
2024年度に使用した紙使用枚数をA4に換算して積み重ねると、高さは約2,050mとなります。これは富士山4合目とほぼ同じ高さになります。また、トイレトペーパーは古紙1kgから約6個再生されますが、使用した紙がすべて古紙再生されたと仮定すると、約55万個分のトイレトペーパーを再生できます。トイレトペーパーの一人分あたり年間使用量を約50個とすると、約10,900人分に該当します。

両面印刷や2in1印刷にする、紙の資料配布をせずにデータ配信する等の工夫を徹底することにより、紙使用量を減らす取り組みをさらに進めます。

●高さ換算 (A4換算、500枚=約4.5cmとして)



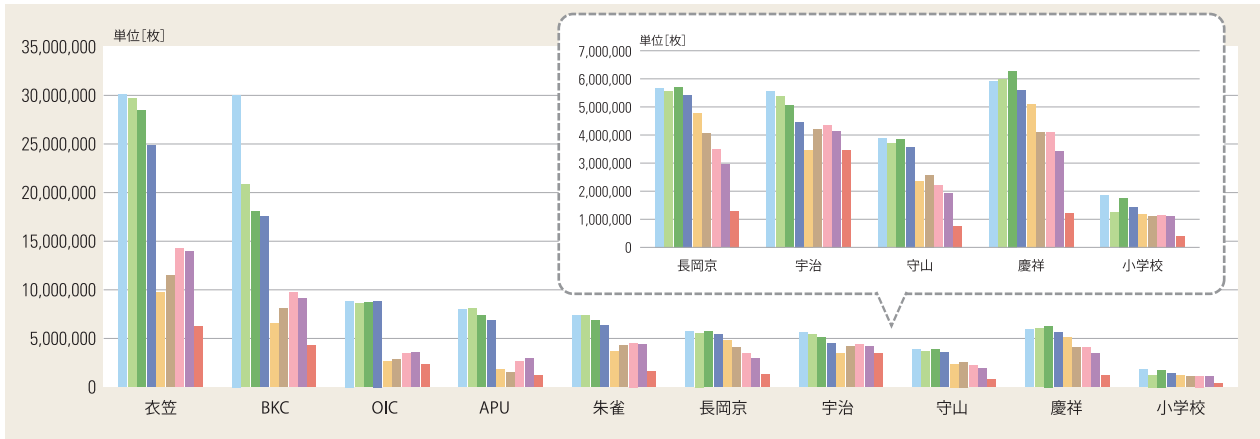
●トイレトペーパー換算 (A4換算250枚=1kg、古紙1kgあたり約6個再生として)



●紙使用量を減らす取り組み



— 2016年度 — 2017年度 — 2018年度 — 2019年度 — 2020年度 — 2021年度 — 2022年度 — 2023年度 — 2024年度



[紙リサイクルの仕組み]



2030年までの省エネ取組方針

立命館では2030年までにCNを実現するため、以下の取組方針に基づき省エネを推進します。取組の実施にあたっては、国・自治体等が実施する各種支援制度も活用します。

01 ハード整備面(施設整備等)

- 高効率空調の導入、ガス空調から電気空調への更新
- 高断熱化、遮熱フィルムの貼付
- その他、省エネ先進技術の導入
- 照明設備のLED化
- 各種省エネセンサーの設置

02 ソフト面(行動変容等)

- 空調設定温度の適正化(夏期28℃設定・冬期19度設定)、空調運用時間の管理
- 省エネ行動のポスター掲示等の広報活動
- 昇降機(EV)の一部停止
- 照明の間引き、こまめな消灯
- ライトダウンキャンペーンの実施
- 学生、生徒、児童主体により省エネに資する取組
- (夏期)暖房便座・自動洗浄温水のOFF
- 各種環境教育の実施
- その他各大学・附属校での特色ある取組

03 体制づくり

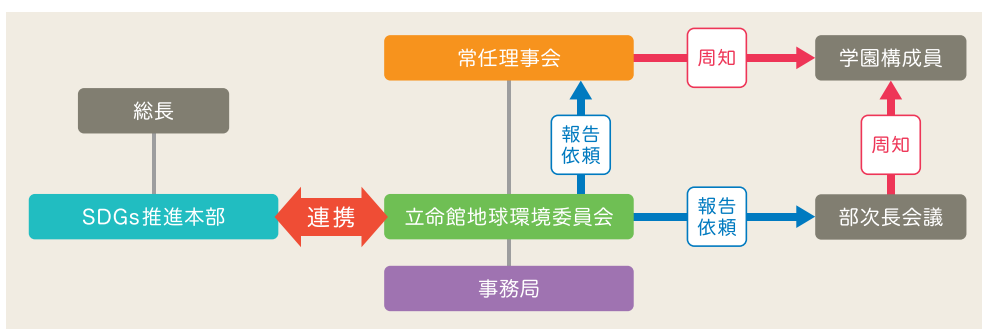
- カーボンニュートラルに資する研究と連携した体制づくり

04 その他(本学のCO₂排出量削減には寄与しないが、社会的意義のある取組)

- コージェネレーションシステム等の活用によるピークカット
- 通勤、通学における公共交通の利用(自家用車の利用削減)
- デマンドレスポンスへの参画
- ごみの分別および再資源化

立命館学園の環境マネジメントシステム

立命館地球環境委員会は、児童・生徒・学生・教職員が学園全体で環境問題に取り組むため、2010年2月1日に発足しました。2021年4月1日からは「SDGs推進本部との役割整理」・「組織規模の適正化」等の観点から組織体制の変更を行い、これまでの各部会を廃止するとともにSDGs推進本部との連携を強化することとしました。



立命館概要

名称 学校法人立命館 創立者 中川小十郎 創立年 1900年(明治33年)(私立京都法政学校)

校地・校舎面積(2025年3月31日現在)

キャンパス	土地面積	延床面積	キャンパス	土地面積	延床面積
朱雀キャンパス	8,119.02㎡	27,152.15㎡	立命館中学校・高等学校	42,483.00㎡	37,827.63㎡
衣笠キャンパス	127,599.03㎡	174,887.24㎡	立命館宇治中学校・高等学校	133,335.74㎡	28,216.27㎡
びわこ・くさつキャンパス	629,521.88㎡	257,076.13㎡	立命館慶祥中学校・高等学校	238,218.76㎡	21,721.72㎡
大阪いばらきキャンパス	108,179.82㎡	161,541.20㎡	立命館守山中学校・高等学校	61,910.95㎡	22,358.69㎡
立命館アジア太平洋大学	427,187.20㎡	128,057.45㎡	立命館小学校	10,147.00㎡	11,357.91㎡

教職員数(2025年5月1日現在)

立命館大学教員	1,463名
立命館アジア太平洋大学教員	212名
小学校・中学校・高等学校教員	598名
学校法人立命館職員	1,365名

学生・生徒数(2025年5月1日現在)

立命館大学	大学 34,883名	大学院 4,380名
立命館アジア太平洋大学	大学 8,549名	大学院 437名
小学校・中学校・高等学校	● 立命館中学校・高等学校…………… 1,800名	
	● 立命館宇治中学校・高等学校…………… 1,752名	
	● 立命館慶祥中学校・高等学校…………… 1,514名	
	● 立命館守山中学校・高等学校…………… 1,525名	
	● 立命館小学校…………… 714名	

立命館のSDGsに関わる取組等をwebサイトで紹介しています。

立命館地球環境委員会では、環境負荷低減活動の一環として、2011年6月に環境HP「eco+R (エコール)」を開設したところですが、「立命館×SDGs」のwebサイトがリニューアルされたことに伴い、その内容を当該HPに移管しました。これまで「eco+R」に掲載していたエネルギー使用量、温室効果ガス排出量、水使用量に関するデータおよびキャンパス毎の最大電力といった情報に加え、SDGsの17目標に関する多様な情報を掲載しています。

「立命館×SDGs」webサイト

<https://www.ritsumeai.ac.jp/sdgs/>



ANSWER

答え

459,022 m³

本学園の2024年度の水使用量です。
500ml入りペットボトルでは約909万本に相当します。



32,238 t-co₂

本学園の2024年度の温室効果ガスの排出量です。これを吸収するためには、琵琶湖の約0.48倍の面積の森林（天然生林）が必要です。